

「鏡よ鏡」

登場人物

四月一日直美 (20)

大学生

小鳥遊友紀 (20)

直美の親友

雨宮武士 (20)

直美の憧れ

荒牧玲奈 (21)

武士の大ファン、親衛隊設立者

雨宮聡士 (11)

武士の弟

尾崎星羅 (7)

迷子の女の子

駅員

星羅の母

ミスコンのスタッフ

ミスコンの司会

○東京・神奈^{かな}大学・キャンパス内公園

日差しの良いキャンパス内の公園、多くの学生が思い思いにくつろいでいる。その一角で、地味でちよいポチャ体型の四月一日直美^{わたぬき なおみ}（20）が爽やかイケメンの雨宮武士^{あまみや たけし}（20）を呼び出している。

直美の親友であり、美人でスタイル抜群の小鳥遊友紀^{たかなし ゆき}（20）が様子を少し離れたところから見守っている。

直美「つ：つつつ、付き合ってください！」
一瞬静寂が辺りを包み込む。

学生たちが皆二人を見る。
雨宮、驚いたように目を見開き直美を見つめている。

直美「あ：えと、ごめんなさい迷惑ですよね
急に呼び出してこんな：忘れてください、
それじゃ：」

直美、いたたまれなくなって言いながら逃げるように立ち去ろうとする。

雨宮「いいよ！」

去ろうとする直美の背中に雨宮が声をかける。

直美、立ち止まりゆっくりと振り返り

雨宮を見つめる。

雨宮がニツコリ微笑む。

雨宮「俺で良ければ。よろしく」

直美「えっ…」

真っ赤になりパニック状態の直美。

友紀、満面の笑みで一人ガッツポーズ。

周囲の学生たちがざわつき始める。

男子学生1「あれ、雨宮だろ」

男子学生2「あ、昨年度のミスコンの」

男子学生1「そうそう、ミスター神大」

女子学生1「うそ、雨宮くんオツケーしちや

ったの!？」

女子学生2「あの子誰？」

女子学生1「えー知らない」

女子学生2「あんな子が雨宮くんのカノジョ

になるの!？」

学生たちのざわめきの中、とりあえず
連絡先を交換する直美と雨宮。
友紀も駆け寄り、二人を握手させたり
互いの肩をポンと叩いたり。
女子学生1「これは親衛隊のお姉さま方、荒
れるわよ」

○同・カフェテリア

学生たちがランチやお茶を楽しんでい
る憩いの場。

直美、友紀とお茶を飲んでいる。

そこへ荒々しい足取りで近寄って来る

あらまきれいな
荒牧玲奈（21）とその取り巻き。

鼻息荒く直美を見下ろす。

直美「あの…なにか…？」

玲奈「あなた？雨宮くんに告白したっていう
のは」

直美「あ、は：はい、そうですけど」

玲奈「どういふつもり！？」

直美「どういふつもりって…」

玲奈「雨宮くんはねえ、私たち親衛隊のアイドルなの。誰も触れてはいけない、手を出してはいけない。遠くから彼を見守り応援することだけが許されているの！それをあなたは！」

直美「え、だって私は親衛隊には入ってな」

玲奈「親衛隊にすら入らないような輩が、雨宮くんに告白するなんて言語道断！」

金切り声で叫ぶ玲奈。

息が上がっている玲奈を取り巻きが落ち着かせる。

取り巻きから受け取った水を飲み干して一息。

玲奈「しかも：何？あなた。そーんな見た目でよくもまあ告白なんてできたものねえ」

直美をジロジロと見る玲奈。

玲奈「特別美人でもない、スタイルだって良くないくせに！はずかしい〜」

取り巻きを煽って大笑いする玲奈。

直美、恥ずかしくなって俯く。

友紀「でも、オツケーしてくれただよ」

友紀、立ち上がって玲奈を見つめる。

友紀の容姿に圧倒され気味の玲奈。

玲奈「な、なによ」

友紀「雨宮くんは、直美の告白にオツケーしてくれただよって言ってんの。告られた本人が
いって言ってんだから、あんたたちにギ
ャーギャー言う資格無くない？」

玲奈「か、彼は優しいから」

友紀「へー、優しいと告られただけで誰でも
付き合っちゃうんだ、軽いんだねー」

玲奈「なっ…」

友紀「じゃあ、ユキも告っちゃおうかなあ。
あんたの言い方だったら、ユキは告っても
いいんだよね？文句言わないよね」

友紀、わざとらしく自らのスタイルと
美貌を強調してみせる。

悔しいが言い返せない玲奈。

友紀「自分が不戦敗だったからって僻んでん
じゃねーよ。そっちの方がよっぽど恥ずか

しいじゃん」

玲奈「…い、行くわよ皆！」

悔しそうに去っていく玲奈たち。

友紀、アツカンベー。

直美「ありがとう、友紀」

友紀「あんなの気にすることないよ。ああいう人はどんな人が告ってたって、絶対不満言うタイプだからさ」

直美「…うん」

友紀「直美はもう、雨宮くんの彼女なんだから。あいつらは、ただの負け犬の遠吠え。

何言われたって、どーんと構えてな」

直美「うん。ありがとう」

友紀「（満足そうにうなずいて）さ、お祝いのやり直し！ちよつとスイーツでも持つてくるね！」

友紀、席を立ちカウンターへと走っていく。

直美のスマホにライン。雨宮から。

雨宮「（LINE文面）改めて、雨宮武士で

す。これからよろしく！」

直美の顔がにやける。早速返信しようとスタンプを返そうとしているとすぐに追加でメッセージが。驚く直美。

雨宮「ところで、これからなんて呼べばいいのかな？俺のことは呼び捨てで構わないけど、俺も直美でいい？」

直美「そ、そんないきなり…た、武士…？武士！『直美』武士！『直美』…」

興奮して妄想に浸る直美。

戻ってきた友紀、呆れて見ている。

友紀「楽しそうだね？直美い」

直美「わ、早かったね！」

友紀、ケーキをテーブルに置きつつ直美をニヤニヤ見る。

友紀「ま、幸せそうで良かったよ。私も推した甲斐があったわ。これからが楽しみだねえ」

直美「（照れて笑う）」

友紀「ほい、それじゃ…」

友紀がコーヒーカップを持ち上げる。

直美もカップを持ち上げる。

直美・友紀「かんぱーい」

カップ同士を打ち付ける。

○直美の部屋（夜）

ぬいぐるみがたくさん置いてある、女性らしい部屋。

アイドルの曲を流しながら、お風呂上りの直美がベッドの上でラインしながらくつろいでいる。髪は濡れっぱなしでボサボサ。

ラインの画面は雨宮とのトーク履歴。何気ない会話を、スタンプも混ぜて長々と続けている。

雨宮「（LINEの文面）それじゃあまた明日。おやすみ（投げキスするスタンプ）」
投げキスのスタンプが嬉しくて、ベッドの上で悶える直美。

直美「おやすみ、武士」

送信。すぐに既読がついて「おやすみ」のスタンプが返ってきた。

直美、満足そうに深いため息。

直美「どうしよ：幸せすぎて死にそう」

ふと、棚の上の鏡が目に入る。

ボサボサの髪で寝転がる直美の姿が映っている。

直美、起き上がり髪を手で梳きつつ鏡を覗き込む。

昼間の玲奈の言葉が思い起こされる。

玲奈の声「そんな見た目でよくまあ告白

なんてできたものねえ」

玲奈の声「特別美人でもない、スタイルだつて良くないくせに！はずかしい」

直美「そんなの：私が一番よくわかってる」

直美、気合を入れるように頬を一叩きするとコスメボックスを開いてスキンケア用品を取り出す。

スマホでポイント講座を流しながらスキンケア開始。

棚の上の時計は「6月10日木曜日 2
3時30分」と表示されている。

○神奈大学・カフェテリア

にぎやかな学内。

学生たちの服装も夏らしくなっている。
壁には今年の学祭のポスターの案内が。
今年もミスコンは開催される。

日付は10月30日。

直美と友紀が仲良くランチをしている。

直美はエビフライセット。

友紀はハンバーガーセット。

離れた席では玲奈たちもランチをして
いる様子。

雨宮が友達と談笑しながらカフェテリア
アに入ってきて、直美に気付きサツと
駆け寄ってくる。

雨宮「直美！」

直美「武士。おはよう」

友紀「おっはよー」

雨宮「（友紀に）おはよう。（直美を向いて）美味そうだな」

直美「今日のオススメランチだよ。私もオススメ」

雨宮「マジ？じゃあ俺もそれにしよ」

入口付近にいた雨宮の友人たちが彼を呼ぶ。

雨宮はそれに応えようと、

雨宮「じゃあな、また夕方」

直美の肩を軽く叩いて去っていく。

直美、手を振って見送る。

友紀「予想以上にうまくいってる感じ」

直美「へへ、毎日楽しいよ」

友紀「見てればわかるー。結構デートしてるんでしょ？」

直美「（照れる）まあね」

友紀「はー、なんだよもう、ユキも彼氏ほしいなー！夏だし？海とか行きたいじゃん」

直美「海といえば：友紀、ちよつと後で買い物付き合っつて」

友紀「いいけど？」

○ショッピングセンター・水着売り場

色鮮やかな水着がたくさん並んでいる。

直美と友紀が品定め中。

友紀が一着、ビキニを手にとって直美に見せる。

友紀「ねえねえ、コレとかいいんじゃない」

直美「可愛い。でもビキニ…」

友紀「なーに言ってるの、ビキニじゃないと可愛くないじゃん！ホラ、コレとかコレも」

次々と水着を直美に渡す友紀。

可愛いけれど大胆なデザインの水着ばかりで、直美は戸惑いを隠せない。

友紀は大振りで立体感のあるフリルが特徴の水着を手取る。

友紀「あ！コレは？今年トレンドらしいよ。

ユキと色違いとかどう？」

直美「わー可愛い！いいねコレ！」

友紀「でしょ？決まり！試着試着っ」

友紀が直美の背中を押して試着室へ向かう。

それぞれ試着室に入り、着替える。

着替え終わるとカーテンから首だけ出す直美と友紀。

友紀「いい？せーので開けるよ」

直美「う、うん」

二人「せーの！」

カーテンを開ける。

スタイルが良く、流行のデザインもよく似合っている友紀。

友紀「結構イイ感じじゃん？」

ややお腹の肉がショーツからはみだし
ていて、ちよつと恥ずかしい直美。

直美「や、やっぱりビキニはちよつと…」

友紀「そんなことないって似合う似合う！」

直美「でもお腹…」

友紀「パレオでも巻けば全然ごまかせるっし

よ！雨宮くんだって気にしないって。ね、

コレで決まり！」

直美、渋々うなずくがお腹の肉が気になって仕方ない。

○直美の部屋（夜）

棚の上の時計は「7月14日水曜日2

0時」と表示されている。

風呂上がり立ての姿でスマホをいじりながら直美が入ってくる。

髪をタオルで拭いてから部屋の隅の体重計に乗る。

直美「…うそ！？」

一度降りてもう一度。

直美「（ため息）やっぱり増えてた…」

机の上のカレンダーには「海デート」と書かれている。

直美のスマホが鳴る。LINEだ。

雨宮「（LINEの文面）どんな水着か、当日楽しみにしてるな」

LINEを閉じると、雨宮とツーショ

ット画像の壁紙。直美、それをじっと見つめて。

直美「やるつきやない…」

○神奈大学・カフェテリア

友紀がハンバーグ定食を頬張っている。

友紀「それでダイエットかぁ。大変だね」

正面に座る直美の前にはサラダのみ。

直美「おかしいと思ったの、昨日のお腹の肉

…あんなにあった？って。そりゃ3キロも

増えてりやそうなるわよ。3キロよ、3キ

ロ。このやばさわかる？」

友紀「ごめん、ユキわかんない。太ったこ

と無いし」

直美、友紀を睨みつける。深いため息。

直美「…でしようね」

急に直美の背後に玲奈たちが現れる。

玲奈「あらぁ？今日は『随分と』小食なの

ね？四月一日さん」

直美「あ…」

友紀「げっ」

玲奈「あら、サラダだけ？ダイエットでもなさるの？やあっと自分の立場がわかってきたのかしら」

玲奈、直美の顔が見える側に回り、あからさまにジロジロと見つめる。

固まる直美。

玲奈「あら？そういえば前にも増して：丸くなつたんじゃない？ほら、こことか？」

直美の横腹をつまむ玲奈。

友紀が咄嗟に立ち上がるが、親衛隊が間に入り邪魔をする。

玲奈「いやーだあ、こんなにお肉がつまめるなんて信じられない！せっかく我らが雨宮くんの彼女になつたっていうのにか？」

友紀「ちよつと…」

玲奈「あなた、ちよつと立場に胡坐かきすぎなんじゃない？」

鋭い視線で直美を睨みつける玲奈。

玲奈「私たち親衛隊を出し抜くならば、こち

らが納得いくお相手でいるよう努力するこ
とは最低限の義務じゃないの？それが、人
気者と付き合うっていうことよ！」

直美、俯いたまま表情は見えない。

何も反応を示さない直美に呆れたのか、
玲奈は深いため息をついて親衛隊を率
いる。

玲奈「…行きましょう」

立ち去っていく親衛隊。

友紀、その背中に思い切り舌を出す。

直美に寄り添う友紀。

友紀「…大丈夫？直美」

直美「…あの人たちの、言うとおりでよね」

友紀「直美？」

スカートの膝辺りをギュッと握り締め
る直美。その丸い手の甲に、涙の粒が
パタパタと落ちる。

友紀「な、直美…」

直美「…ゴメン、私今日は帰るね。そのサラ
ダ、食べといて」

友紀を見ることなく去っていく直美。

○直美の部屋（夕）

カーテンは閉め切った状態、隙間から差し込む夕日だけが僅かに室内を照らしている。

ベッドの上で足を抱えて座り、電話している直美。俯いていて表情は見えない。

雨宮の声（電話） 「別れるって…急にどうして」

直美 「ごめんね…私はやっぱり、武士には釣り合わないと思うの」

○雨宮の部屋（夕）

筋トレをしながら電話していた雨宮、起き上がり電話に集中する。

雨宮 「はあ？ちよっと意味わかんないんだけど…釣り合うって何」

○直美の部屋（夕）

膝を抱える指が震え、力が入る直美。

直美「ちよつとの間だったけど、武士の彼女になれてすごく楽しかった。ありがとう」

雨宮の声「ちよつと直美、何終わる気満々になつてんだよ。俺は嫌だぞ、別れたくなくなか…」

直美「さようなら」

直美、雨宮の声を遮り通話終了する。携帯を放り投げるとそのままベッドに倒れこむ。

投げ捨てられた携帯はベッドの下でまだビジートーンを鳴らしている。

○雨宮の部屋（夕）

一方的に電話を切られた雨宮、携帯を握り締める。

雨宮「ちよつ：直美？直美！」

応答がない電話。
力なく携帯を床に置く雨宮。

部屋のドアが少し開いて雨宮聡士

(二) が覗いている。

見られているのに気づき、慌てて居住
まいを正す雨宮。

雨宮「何見てんだよ」

聡士「兄ちゃん、フラれた？」

雨宮「フラれてねえ！」

聡士「なぐさめてやろうか」

雨宮「うるせえっ」

雨宮、ドアに思い切りクッションを投
げつける。

咄嗟にドアを閉じて逃げる聡士。

いなくなったのを確認してから、雨宮

は深いため息を吐く。

○直美の部屋（朝）

引かれたカーテンの隙間から朝日が差
し込んでいる。

鳥の元気なさえずりに混ざって、延々
と呼び出し音が鳴っている。

棚の上の時計は「7月19日月曜日9時」と表示されている。

直美は頭から布団をかぶったまま動かない。

枕元の携帯の画面には着信者・友紀の名前が。

モゾモゾと動くが電話を取る気配はない直美。

部屋の外から大きな足音が近づいてきて、勢いよく扉が開かれる。

直美「!?!」

驚いてドアの方を見る直美。髪はボサボサ、目は泣きはらして真っ赤な姿。

友紀「起きろ！電話に出るバカ！！」

携帯片手に仁王立ちの友紀。

直美「ゆ、友紀!?!」

友紀、荒々しい足音を立ててベッドサイドに近づき、直美の顔を両手で挟み込むと思いい切り覗き込む。

タコロになる直美。

直美「なにをするの、ゆきい…」

友紀「こんなことだろーと思った！金曜からあんた連絡取れないし、雨宮くんからは相談メールくるし！もーどーしてそーゆうとこだけ行動早いわけ！？」

直美、視線を逸らす。

友紀、呆れたように大きく息を吐く。

友紀「親衛隊の言葉なんて無視していいんだってば。僻んでるだけなんだもん、相手してやる必要ないよ」

直美「…でも、言ってること正論だよ。やっぱり武士の横に私みたいなのは」

友紀「雨宮くん本人が嫌がってないのに気にする必要ある？」

直美「友紀にはわかんないよ！」

叫ぶように零す直美。

黙って直美を見つめる友紀。

直美「…友紀みたいにキレイな人には、私みたいなものの気持ちわかんないよ…。赤の他人の冷たい視線がどんなに怖いかな」

× × ×

告白当時の周囲の学生たちの会話が甦る。

男子学生1 「あれ、雨宮だろ」

男子学生2 「あ、昨年度のミスコンの」

男子学生1 「そうそう、ミスター神大」

女子学生1 「うそ、雨宮くんオツケーしちや

ったの!?!」

女子学生2 「あの子誰？」

女子学生1 「えー知らない」

女子学生2 「あんな子が雨宮くんのカノジョ

になるの!?!」

『あんな子が』がリフレインする。

× × ×

直美 「友紀や武士がどんだけ良くしてくれて

も…そのせいで周りから勝手に疎まれて惨

めになるの…」

直美の目から涙がこぼれる。

友紀、表情を崩すとベッドサイドに膝

をつき直美の頭を撫でてやる。

直美、友紀にしがみつく。

友紀「そんなに思いつめちゃってたか。ごめんね、あんたの気持ちも考えないで突っ走っちゃって」

直美、無言で首を振る。

友紀「よっしゃ、じゃあこうしよう？」

直美の肩を掴み顔を見つめる友紀。

友紀「ユキと一緒にさ、ミスコン出ようよ」

直美「…は？」

友紀「ユキはさ、今のまんまの直美でも全然大好きだけどさ、そんなに自分に自信が持てないってんなら、自信が持てるようになってやろうじゃん。とことんキレイになってミスコンで優勝しちゃうわけよ。そしてら、自信もって雨宮くんと付き合えるっしょ？」

直美「な、何言ってるのそんなの私なんかじや…」

友紀「わーかってないなあ。直美、あんた可愛いわ？ 痩せたらユキなんかより、ずっと

周りの男がほっておかないかもね」

直美「…そんなこと」

煮え切らない態度の直美。

友紀「じゃあいいの？このまんまで。雨宮く
んと別れたまんまで。納得できないから、

三日三晩泣いてたんじゃないの？」

直美「…このままは、やだ」

友紀「雨宮くんと付き合いたい？」

直美「付き合いたい」

友紀「雨宮くんとデートしたい？」

直美「デートしたい！」

友紀「このままでいいの？」

直美「…変わりたい。友紀みたいに、自信が

ほしい」

友紀「オツケー！」

友紀、満面の笑顔を浮かべると立ち上
がる。

机の上から卓上カレンダーとペンを持
つてくると、ミスコン当日に印を付け
る。

友紀「ミスコンまで大体三か月」

直美、大きくうなづく。

友紀「題して直美キレイキレイ計画！やる

ぞ！」

直美「おー！」

友紀「キレイになるぞ！」

直美「キレイになるぞ！」

友紀「雨宮くんに告白するぞー！」

直美「告白するぞー！」

友紀「親衛隊なんかやっつけるぞ！」

直美「やっつけ：え！？」

友紀「それくらいの心構えてこと！」

直美「わかった（咳払）やっつけるぞー！」

直美と友紀、最後にハイタッチ。

○フィットネスジム（初日）

ダサイジャージ姿の直美とオシャレな

ジャージ姿の友紀が入ってくる。

トレーナーに指導を受けつつ一緒にト

レーニングをする。

ルームランナーで走る直美と友紀。友紀の速度になかなかついていけない直美。

○神奈大学・カフェテリア

カウンターでスマホ片手にカロリー計算しつつ注文する直美と友紀。
健康的なメニューで、仲良くランチ。

○エステサロン

エステを受ける直美と友紀。
美容部員から説明を受け、スキンケアの方法を細かく指導を受ける。

○直美の部屋

買い込んできた化粧品を並べて鏡を覗き込みながらスキンケアに勤しむ直美。
姿見を置いて全身を確認する直美。
体重を測りグラフを書く直美。
筋トレをする直美。

○アパレルショップ

オシャレだけど落ち着いた雰囲気の内。
内。

友紀が直美に服を見立てる。

地味な色を選ぶ直美に、明るい色を勧める友紀。

○美容院

伸びきってしまった髪をカットしても
らう直美。

髪色も明るく、軽やかな髪形になった
直美に、友紀は笑顔でサムズアップ。

○フィットネスジム（一か月後）

友紀同様オシャレなジャージで登場し
た直美。

ルームランナーで、友紀についていけ
るようになってきている。

筋トレはまだ少し足りない模様。

○直美の部屋

バックをしながらストレッチや筋トレに勤しむ直美。

体重を測り、グラフを書き込む。

順調に右肩下がりの様子に、満足げにうなづく。

○神奈大学・カフェテリア

学祭のポスター、ミスコンの案内部分に「募集締め切り迫る！」というポップが貼られている。

カロリー計算されたメニューを楽しむ

直美と友紀。

友紀「それで？調子はどんな感じ？聞くまでもないかもだけど」

直美「いまのところは順調だと思う！体力もついてきた気がするし、体が軽いなだね」

友紀「いい傾向じゃん！お肌もツヤツヤしてきたしね」

直美、照れ笑い。

雨宮が入ってくる。直美たちに気付いて声をかけようとしたが、先に彼女たちの元へ親衛隊を引き連れた玲奈が近づく。

声をかけそびれた雨宮、様子が気になり遠くから窺う。

玲奈「こんにちは、四月一日さん」

直美「あ…」

友紀が睨みつけるが、直美はそっと手で制止する。

直美「こんにちは、荒牧さん」

玲奈「ねえ、ちょっと小耳に挟んだんだけど。

あなた雨宮さんと別れてたって本当？」

直美「ええ、まあ…」

玲奈「本当なのね！？いやだわ、だったらどうして早く言ってくれなかったの？やっとななたも立場をわかってくれたのね嬉しいわ！」

玲奈、直美の手を握る。

玲奈「これからは仲良くしましょう」

直美、弾くように玲奈の手を振り払う。

驚いて直美を見る玲奈。

直美「ごめんなさい、あなたと仲良くする気はありません」

玲奈「…なぜ？」

直美「私、もう一度雨宮くんに告白する予定なので。キレイになって、自分に自信が持てるようになったら告白する予定なんです」

雨宮、驚いて目を見開く。うれしくてにやけそうになる顔を必死でごまかす。

玲奈「はあ！？そんなこと誰が許可すると

…」

直美「別にあなたの許可はいらないですよ
ね？ただの私設親衛隊なんですから」

強気な発言の直美に感心する友紀。小さく拍手する。

玲奈「なっ…」

顔を真っ赤にして拳を震わせる玲奈。

玲奈「ちよっと前よりは少しだけマシになっ

たかもだけど？その程度で威張らないでくれる！？」

直美「まだこれからキレイになる予定なので」

玲奈「なっ…生意気な口を…」

友紀「はいはい、そろそろおしまいにして。

ご飯がまずくなっちゃう」

今にも飛びかからんばかりの玲奈と直美の間に割って入る友紀。

親衛隊が玲奈に落ち着くよう声をかけている。

玲奈、促されるまま深呼吸し若干落ち着いた模様。

玲奈「ま…せいぜい頑張ることね。一度自分から振っておいて上手くいくかしら」

直美「その時は仕方ないです」

玲奈、鼻を鳴らして去っていく。親衛隊の面々も後に続く。直美に軽く会釈していく者も。

直美、大きく息を吐き椅子の背もたれ

に倒れ掛かる。

友紀「直美、頑張ったね」

直美「ちよつとやりすぎちゃったかな」

友紀「あれくらいでいいと思うよ。あんたは
気弱すぎたくらいよ」

友紀、直美にサムズアップして微笑む。

直美も照れ臭そうにサムズアップ。

○同・カフェテリア近くトイレ前

直美がトイレから出てくる。

雨宮がカフェテリアから出てきて、二
人の目が合う。

直美「あっ…」

雨宮「あっ…」

お互いに立ち止まるが、微妙な間。

雨宮「…元気そう、だな」

雨宮が明るく言うと、直美の表情に安
どが浮かぶ。

直美「あ、うん…」

友紀がトイレから出てくる。

友紀「おまたせー直美！」

雨宮を見つけて目を丸くする友紀。

慌ててその場を離れようとする雨宮。

雨宮「それじゃあ！」

友紀「ちよっと待って雨宮くん！」

友紀が雨宮の服を掴み引き止めると、

反対の手で直美を雨宮の方へ押しやる。

驚いて友紀を見る直美と雨宮。

友紀「ごゆっくり」

ウインクを送る友紀。

○同・キャンパス内公園

昼休み明けだからか、若干静かな公園。

ベンチに座る直美の元に、雨宮が缶コ

ーヒーを二本持ってくる。

直美「ありがとう」

雨宮、直美に一本手渡すと自分も隣に

座る。

間。

直美「…ごめんね、この間は。私、一方的に

言いたいことだけ言って：」

雨宮「いや、俺の方こそ。あの後、小鳥遊さんに聞いたよ。俺の親衛隊って奴らがお前に酷いこと言ったって。俺と付き合ったりしなきゃ、お前が傷つけられるなんてこともなかったよな。ごめん」

直美、大きく首を横に振る。

直美「武士は悪くない。そりゃあの時ちよつと傷ついたけど、今はもう平気だもん」

直美、立ち上がりくりと一回転してみせる。

直美「友紀が励ましてくれてね、今いろいろ頑張ってるんだ」

雨宮、まぶしそうに眼を細めながら直美を見つめる。

雨宮「うん。すごく感じるよ。どうせならその励ます役目を俺がやりたかったけどな」

直美「え？」

雨宮「こつちの話。：それで？」

雨宮、立ち上がり直美の前に立つ。直

美の頭を軽く叩く。

直美、目を丸くして雨宮を見返す。

雨宮「そろそろ、ヨリ戻してくれる？」

雨宮、微笑む。

直美もニツコリ微笑み返す。頭上の手を手に取るとそっと下ろして握る。

直美「今度のミスコンにね、友紀と一緒に出ようって言ってるの」

雨宮「?…うん」

発言の真意が掴めず首を傾げる雨宮。

直美「いっぱい頑張ってキレイになって、ミスコンで優勝できたら、きつとすごく自分に自信持てると思うんだ。だからね…」

直美、しっかりと雨宮の目を見る。

直美「ミスコンで優勝したら、もう一度告白させてね。それが、私のけじめ」

雨宮「直美…」

雨宮、一瞬驚きの表情を浮かべるがすぐに優しく微笑み、直美の手を両手で強く握る。

雨宮「わかった。応援してる」

直美も力強くうなづく。

物陰にはいい雰囲気、直美と雨宮を観察し、一人満足げにうなずいている友紀の姿。

○直美の部屋

右肩下がりが続く体重グラフのかなり

下部に赤で大きく印を付ける直美。

ベッドに腰かけて様子を見ている友紀、少し呆れ顔。

友紀「さすがに目標高すぎない？」

直美「親衛隊にも武士にも宣言しちゃったんだもん、もう後には引けないのよ、やるしかないの」

熱く語る直美。

直美「簡単に達成できる目標じゃ意味ないの。ちよっと無謀かなってくらい高めに定めた方がやってやるって気持ちになるもんなのよ」

友紀「面構えが変わって来たねえ直美！」

拍手を贈る友紀。

直美、得意げに胸を張ってみせる。

直美「結果出てきてるなって実感あるからさ、
楽しくなってきちゃって。今なら何でもで
きる気がする！」

友紀「前向きなのはいいことだわ！ユキもう
かうかしてらんないなあ」

直美「よし、友紀！ジム行こジム！」

友紀「行きますか！」

張り切って部屋を出ていく二人。

○同（ミスコン当日）

棚の上の時計は「10月30日土曜日

9時」と表示されている。

体重グラフは途中停滞期を挟みながら
も無事目標ラインを突破している。

直美、姿見の前で何度も服装をチェッ
ク。以前に比べてかなりキレイに、オ
シャレになっている。

直美「…よし」

鼻息荒くうなずき、頬を叩いて気合を入れる。

友紀から着信。外出の準備を整えながら電話で話す。

○直美の家・玄関（内）

話しながら玄関まで向かう直美。

直美「うん、うん大丈夫。今出るところ。余裕持つかないとね。…うん、わかったじゃあ着いたら連絡する。後でね」

直美、電話を切ると靴を履き家を出る。

直美「行ってきます！」

○直美の家・玄関（外）

直美、家の前で大きく深呼吸。

直美「いざ、出陣！」

直美、歩き出す。

○神奈大学最寄りの駅構内

携帯で時間を確認しながら直美が大学
に向かって歩いている。

時間は10時30分頃。

直美「よし、余裕」

リュックを背負った尾崎星羅（7）が
泣きながらウロウロしている。

直美と星羅がぶつかり、星羅がしりも
ちをついてしまう。

激しく泣き出す星羅。

直美、慌てて慰める。

直美「ご、ごめんねお姉ちゃん見てなくて：

大丈夫？どこか痛い？」

星羅、首を横に振るが泣き止まない。

直美「どうしたの？何か困ってるの？」

直美、一生懸命宥めながら尋ねる。

星羅、しゃくりあげながら。

星羅「ママあ…」

直美、驚く。

○ 神奈大学・学祭会場

学祭で盛り上がっている学内。

学生が運営する食べ物やゲームの屋台が並び、どの店も客が大勢並んでいる。賑やかな学内の中心・ステージでは順番にバンドのライブやダンスショーが繰り広げられている。

ステージ横のプログラム看板には『メインイベント・ミスコン13時から』と大きく書かれている。

○同・ミスコン参加者控室

入口のドアには参加者一覧のチラシが貼ってある。

直美、友紀の写真はもちろん、他の参加者もなかなかレベルが高い。

控室内、参加者たちは各々の準備に余念がない。

その一角でソワソワと直美の到着を待っている友紀の姿。

友紀の携帯が鳴り、慌てて取る。

友紀「もしもし直美？ちょっとあんた何してるの？もう皆ほとんど控室入りしてるよ」

○神奈大学最寄り駅・駅員室

駅員が泣いている星羅を宥めながら話を聞いている。

それを横目で見ながら直美が小声で電話している。

直美「それがね、ちょっとトラブっちゃって…まだしばらく行けそうにないんだ」

友紀（電話の声）「トラブル？まさか事故にでも遭った？」

直美「事故といえど事故かも…ううん、別にケガとかはないんだけど、とりあえずまだ無理かなって」

星羅「うわあああん！！」

星羅が泣きながら直美に飛びついてくる。その頭を撫でてやる直美。

○神奈大学・ミスコン控室

携帯から聞こえてきた星羅の泣き声に
ビツクリする友紀。だが状況が少し読
めた。

友紀「…なんとなくわかった。巻き込まれち
やっただのね」

直美（電話の声）「だってほっとけないか
ら」

友紀「時間間に合うの？（壁の時計を見て）
ミスコン1時からだよ、もう1時間くらい
しかない」

○神奈大学最寄り駅・駅員室

直美も腕時計を見る。

直美「わかってる。多分大丈夫」

友紀（電話の声）「それならいいけど…。

わかってる？今日は大事な日なんだから。
今まで頑張ってきたのも今日のためなんだ
し」

直美「うん。私も諦める気ないよ。必ず行く
から」

星羅が直美を見上げている。その頭を撫でてあげながら電話を切る直美。

星羅「お姉ちゃん、行っちゃうの？」

直美「ん？行かないよ。星羅ちゃんがママとちゃんと会えるまで一緒にいるからね」

星羅「うん！」

直美が笑いかけると星羅も微笑む。

二人で並んで駅員室の椅子に腰掛ける。チラリと壁の時計を見る直美。

○神奈大学・カフェテリア

学祭のため、一般客も多くにぎわっている。

携帯を見つめながら席についている友紀。

カフェテリアに入ってきた雨宮がその姿を見つけ駆け寄ってくる。

雨宮「小鳥遊さん」

友紀「あ」

雨宮「こんなとこにいていいのか？もうすぐ

ミスコン始まるんじゃないのか」

友紀の向かいに腰掛ける雨宮。

雨宮「直美は？トイレ？」

友紀「まだ来てないの」

雨宮「え、だって」

友紀「それがねえ…（ため息）なんかまたお人よしやっちゃってるみたい」

館内放送がかかる。

放送（声）「まもなく神大祭のメインイベント、ミスコンのステージショーが始まります。出場者の方はステージ裏へお集まりください。繰り返します…」

友紀が立ち上がる。

友紀「ヤバ、もうそんな時間なんだ…」

雨宮「とりあえず行きなよ。君も出場者だ

ろ？」

友紀「うん、でも…」

雨宮「直美のことはまかせてくれ」

キラリとした目で友紀を見る雨宮。

友紀は一瞬迷いを見せたが、微笑んで

うなずく。

友紀「…わかった。よろしく。いってきます」

雨宮「ああ」

駆け出していく友紀を見送り、雨宮も席を立ちカフェテリアを出ていく。

○神奈大学最寄り駅・駅員室

やっと再会できた母親に泣いて飛びついている星羅。

星羅の母親は星羅の頭を優しく撫でてやりながら、駅員と直美に何度も頭を下げる。

星羅の母「本当にありがとうございました！

なんとお礼をしたら…」

直美「いえ、いいんです」

直美、跪いて星羅に笑顔を向ける。

直美「お母さんと会えて良かったね」

星羅「うん！お姉ちゃん、ありがとう」

駅員「この方がずっと一緒にいてくれたおか

げでお嬢さんも落ち着いてくれてたよう

で」

星羅の母「まあ：すみません、あなたも何か用事があったでしょうに：」

直美「ホント気にしないでください、大丈夫ですから！あ、それじゃあ私はそろそろ

…」

会釈をして駅員室を出ようとする直美。その背中に、星羅が大きく手を振る。

星羅「お姉ちゃん、バイバーイ」

直美も手を振り返す。

星羅の母がまた深々と頭を下げる。

直美も頭を下げ返しながら駅員室を出る。

○神奈大学最寄り駅構内

駅員室から少し離れたところで立ち止まり、息を吐く直美。

腕時計を見る。時間は12時55分。

直美「…後5分：こりや無理だわ…」

直美、壁に力なくもたれかかる。

○神奈大学・ミスコンステージ

ステージショーが始まっている。
たくさんの観客が見守る中、出場者たちが壇上に上がりパフォーマンスをしている。

○同・ステージ袖

胸に番号札「5」を付けた友紀が舞台袖で他の出場者たちと待機している。
番号札「6」がテーブルの上に放置されている。
友紀、近くを通ったスタッフを捕まえて。

友紀「あの、四月一日直美来ました？」

スタッフ「え？あ、6番の子？まだ来てないみたいですね」

友紀「連絡は？」

スタッフ「誰か取ってると思うけど、でもも

う不戦敗決定だと思えますよ？」

友紀「不戦敗：」

ショックを受ける友紀。

遠くからスタッフを呼ぶ声がして、スタッフは軽く会釈をすると足早に去っていく。

○神奈大学最寄り駅構内

ベンチに座ってLINEを打っている

直美。

直美「（LINEの文面）ごめん、間に合わなかった！私の分も、友紀が優勝してね？

後で会場で会おうね！」

送信。

直美の表情は柔らかい。

直美「ま、仕方ないかあ」

立ち上がり大学へ向かって歩き出す。

○大学までの道中

ノンビリと風景を楽しみながら歩いて

いる直美。

遠くから何かを探しながら走ってくる
雨宮。

雨宮、直美を見つめる。

雨宮「直美！」

駆け寄ってくる雨宮。

直美「武士……」

雨宮の登場に驚きを隠せない直美。

直美の前にたどり着く雨宮。相当走っ
てきたのか、肩で息をしている。

雨宮「やっと……みつけた……」

直美「えっと、武士、何してるの、なんでこ
こに……」

雨宮「君が来てないから探してた」

直美、気まずそうに笑う。

直美「あはは、そっか……ごめんね。ちょっと
寝坊しちゃってさあ、起きたらこんな時間
で。こりやミスコン絶対間に合わないわー
って思って、ノンビリ歩いて……」

雨宮、直美を強く抱き寄せる。

驚く直美。

直美「たっ…武士？」

雨宮「嘘つくなら、もっとお前らしい嘘にし

とけよ」

直美「…友紀に聞いた？」

雨宮「お人よしやってるって」

直美「ははは、お人よしかあ」

そっと離れる二人。直美は雨宮を見れない。

直美「…けじめ、つけれなくなっちゃった」

笑って見せる直美だが、力はない。

直美「あんなに大口叩いたのに、情けない結果でごめんね。出場して最下位だったーとかならもうちょっと、言いようもあるんだけどね」

雨宮「じゃあ、さ。俺から言わせてよ」

雨宮、直美の顔を両手で挟みこちらを向けさせると、じっとその瞳を見つめる。

雨宮「君のこと、ずっと前から好きでした。

俺と付き合ってください」

目を丸くする直美。

直美「え：ずっと前からって…」

雨宮、微笑む。

雨宮「直美は気付いてなかったっばいけど、俺結構君のこと見てたよ」

○（回想）神奈大学・カフェテリア

直美と友紀が仲良く話している。

近くを通った学生が落としたハンカチを拾って声をかけ届けてあげる直美。

雨宮（声）「俺が見る君は、いつも笑顔で誰かを助けてあげてた」

○（回想）神奈大学・エレベーターホール

エレベーターを待っていた直美の後ろを、講義に使うらしい大型の荷物を運んでいる教授が通る。

直美、エレベーターに乗るのを止めてその荷物を運ぶのを手伝い始める。

雨宮（声）「一つ一つは大した親切じゃないのかもしれない。でも、いつでも誰かに優しい君を見てずっと気になってたんだ」

○（回想）神奈大学・キャンパス内公園

告白する直美。それを受ける雨宮。

雨宮（声）「だから、君から告白してくれてすごく嬉しかった」

○大学までの道中

真っ赤な顔で俯く直美。

雨宮「別れるって言われたのはすごくショックだったな」

直美「ご、ごめん…」

雨宮、小さく笑って直美の頭を軽く叩く。

雨宮「でもさ、君がなんで俺と別れるって言ったか、なんで急にキレイになろうと努力し始めたかを知ったらさ、もう応援するしかないなって思ってた。」

それで、その結果がどうであれ、今度は俺から告白しようって決めてた」

直美「武士…」

雨宮、直美にしっかりと向き合い真剣な表情。

雨宮「俺、直美が好きだよ。俺と付き合ってほしい」

手を差し出す雨宮。

直美、嬉しくて泣きそうになりながら、何度も頷いてその手を取る。

直美「…はい！」

握った手を引き寄せ、直美を抱きしめる雨宮。

○神奈大学・ミスコン会場

ステージ上では今まさに結果が発表されていているところ。

壇上から客席をじっと探している友紀。遠くから、直美が雨宮と手を繋いで走ってくるのが見えた。

友紀、ホッとして笑顔を浮かべる。

最後列で観ていた玲奈の横に直美と雨宮がたどり着く。

玲奈、隣を見てビックリ。

玲奈「わ、四月一日さん！？なんであなたこんなところに」

雨宮「結果発表は？」

玲奈「これからのようですけど：四月一日さんあなた不戦敗ってどういうこと？せっかく結果出してきてたのに：」

司会者「それではラスト！今年度のミス神大を発表します！」

大げさなドラムロール。

直美と雨宮、その音でステージに向き直り祈り始める。

玲奈、状況が掴めないままステージを見る。

友紀、晴れやかな表情で結果を待つ。

ドラムロールが終わる。

司会「エントリーナンバー5番！小鳥遊友紀

さん！」

歓声があがる。

直美と雨宮、飛び上がって喜ぶ。

壇上でトロフィーを受け取った友紀、

直美に向かってサムズアップ。

友紀「直美ー！おめでとー！！」

直美、友紀に向かってサムズアップし、
大声で。

直美「友紀ー！おめでとー！！」

会場中が歓声に沸いている。

玲奈、抱き合って喜ぶ直美と雨宮を見て何となく察したのか、微笑み拍手を贈る。

壇上で表彰が続く中、直美と雨宮は見

つめあい、笑いあう。

強く互いの手を握り合って。

E
N
D